HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	現下における自動車企業の職場構造と労働者生活：A自工M製作所における事例研究：序
Author(s)	布施, 鉄治
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 11
Issue Date	1987
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/24465
Type	departmental bulletin paper
File Information	11_Jo.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

序

本研究報告書は，私たち研究グループが昭和57年以降実施し，現在も持続している文部省科学研究費補助金総合研究A「戦後日本における住民層の生活様式の変容と生活圏樹立に関する基礎研究」（研究代表者，布施鉄治）の研究成果の一端である。

この倉敷市域総合調査研究の研究成果はすでに，分析シリーズとして5冊刊行している。本研究報告書は，分析シリーズ6として位置づけられる。分析シリーズ1で，私たちは，この倉敷市総合調査における「課題と分析方法」についてふれたが，倉敷市は，ここに指摘するまでもなく，戦前，わが国資本主義経済の発展を支えた「繊維工業段階」を劃した地域社会である。そうした伝統の上に，いわばそれに累重せる形で，戦後の「高度経済成長」期，重化学コンビナートが，水島地区に，わが国第4の重化学工業地帯を目して，国策として定置せられた。その意味において，わが国資本主義の発展と共に，すなわち，「繊維工業段階」→「重化学工業段階」へのわが国社会の質的変容を伴なう地域社会自体の累重的発展の年輪そのものが，この地域住民諸階層の生活の営為そのものとして結晶しているとみなければならない。

私たちの調査研究の方法論の大枠については「生産・労働－生活過程」分析視角，「機構－構造」分析視角としてすでに提示してあるところだが，この倉敷市調査研究において，私たちが何よりも含意したことは，地域住民諸階層の現実の歴史を刻む，その生活における諸過程――それ自身，所謂「主体形成」となるが――，その諸過程が，自らのものとしての地域社会のあらたなる形成として如何につみあげられているか，ということをあきらかにすることにあった。そこには，半共同体社会から近代的共同社会（市民社会）の確立，成熟へと導かざるを得ないひとつの営為がある。地域的にみると，封鎖的な社会から，よりひらかれた社会へ－生活圏の拡大　として立ちあらわれるものであるが，それは，同時に，すでに国独資段階に達した中での生産諸力の発展にともなうわが国社会の国際化の進展といわれる事態の進展の中で，地域にあらたに定置された巨大企業の事業体の根づき，そこにおけるあらたなる生産・労働の型の変化を無視しては語られぬものとして存している。ある意味では，そこを拠点としての地域社会再編，変動がなされているといってよい。

こうした現実の中での地域社会の構造的変動の諸相を，私たちはひとつのモノグラフ研究としてあきらかにすることを意図した。

社会学的分析にとって統計的変動調査研究と共にモノグラフ調査研究が，きわめて重要な意味をもつのは，生活レベルにまでおりて，社会変動の有機的な構造変動の諸相を，産業・生活・社会のレベルにわたって統一的に把握，分析することを可能にするところにある。わが国，村落社会分析に関しては，しばしばこの方法が用いられ，このことを土台として戦前段階のわが国社会の構造分析が可能とせられたことは，有賀喜左衛門らの業績をみれば，あきらかであろう。ところで，都市社会分析に関しては，こうしたモノグラフ調査研究がきわめて劣しい。戦前のいわゆる「繊維工業」段階を劃する都市におけるかかるモノグラフ調査研究も正直にいって私たちはもちえていない。ましてや，その土壌の上に「重化学コンビナート」が定置され，資本主義社会としてのわが国のあらたなる段階を劃

そうとしている，いわば変動期にある都市社会の――その変動は当然のことながら，地域社会をそれ自体広域地域圏として拡大せざるを得ないが――，モノグラフ的研究は皆無に等しいといってよい。もとより先駆的研究はあるが，本研究はそれを土台としてのモノグラフィー研究を目ざしている。この場合，当然に，それに相応した分析方法が必要とせられるわけで，私たちはさきにもふれたが，その基底的分析方法として「生産・労働－生活過程」分析，「機構－構造」分析の方法をすでに提示している。

現倉敷市は，旧市，倉敷，児島，玉島を合併して，その中に水島を造成した地域である。各地区の社会構造は，現状においてもあきらかに異なり，いわば四極構造をなしている。基底としての地区産業構造，そして，その産業を土台としての志向性があきらかに異なっているのである。その中で，水島重化学工業地区創設の意味，効果は地域社会再編成の諸過程となって立ちあらわれているが，地域社会レベルにひきよせていうと，所謂「新市合併」の問題がそこにはあきらかに看取されうる。

本研究では，こうした特質をもつ倉敷市調査研究の諸結果をシリーズとして刊行しているが，本研究報告書は，水島地区に創設せられた諸企業のうち，下請企業再編をとおしてとくに地域社会への根づきが，顕著にみられるＡ自動車Ｍ製作所を事例分析の対象とした調査研究をとりまとめたものである。論考としては，この地区にあらたに定置せられたＡ自動車産業Ｍ製作所において現下形成されている「労働－協業形態の質的分析」（藤井史朗），組立ラインにおける「労働の特質とジョブ・コントロール」（浅川和幸），組立ライン職場における職場社会の構造と労働者の労働生活規範（小林甫），彼ら労働者の地域生活とかかわる生涯生活志向（小林甫），Ｍ製作所に域外から広汎に定置せしめられた若年層の分析「青年労働層の職場生活と価値志向」（中江好男）を収録した。

ことわるまでもなく，ここに収録した諸論考は執筆者の責任においてなされたものであるが，少なくともモノグラフ的研究のきわめて劣しい今日のわが国産業・労働社会学の分野では，一定の貢献をなしうるものと確信している。数次にわたる継続的調査に御協力をいただいたＭ製作所及び調査対象の方々の御好意に対して心から感謝する次第である。

なお，本研究シリーズでは，すでにシリーズ２として，水島地区の社会構造の分析を行なっている。「重化学工業地帯立地企業の重層的構造と〈構造不況〉」「水島における地域中小零細事業所の構造と経営」「水島における地域住民層の生活史とコミュニティ形成過程」の諸論考がある。また，繊維産業地帯としての現下の児島地区の分析に関しては，分析シリーズ３・４，がある。あわせて参照していただけたら幸いである。

私たちは，この分析シリーズ６・Ａ自工・Ｍ製作所の職場と労働者生活分析にひきつづいて，Ｍ製作所のこの地域社会の中に張りめぐらした下請企業群――第１次下請（協力会社）――→第２次下請――第３次下請を諸階梯ごとに分析し，階梯ごとの地域事業体の技術革新にともなう合理化の実相，そこでの職場生活，労働者諸階層の全生活の社会的再生産過程をＡ自工労働者との比較をとおして分析した諸モノグラフ研究を収録した分析シリーズ７を用意している。そこでは地域社会生活との関連，その意味において生活過程の変動に相応した現下のこの地域社会の構造的変動とは何かがあきらかにされる。

１９８７年　３月　　布施鉄治